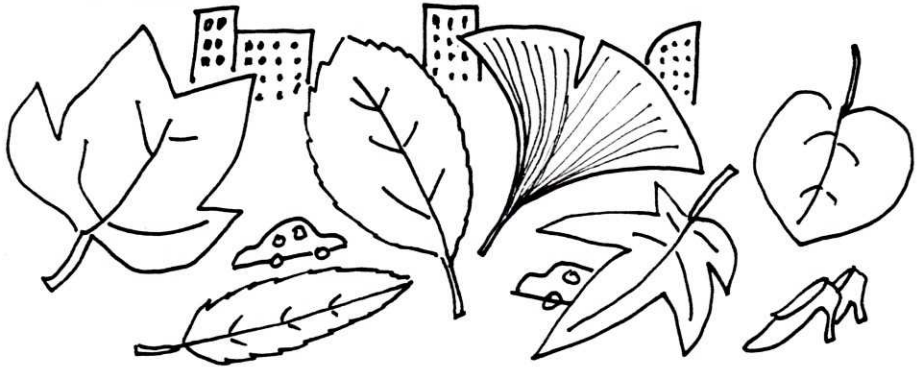




う 羽 化 が

1997年10月
第4号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 宗 助 悦 子



テーマ：『心に残った本 Part. 2』

目 次

連載「EIBRK 漢点字変換システムについて」(4)	i (中央)
特別執筆「インターネット時代の漢字」 （横浜国立大学教育学部 村田忠禧教授）	1
テーマ：「心に残った本」	3
連載マンガ「となりのシロー君」(3)	12
五七五のはなし	16
漢点字ってどんな字？ 3	17
同報通信『雑談』より 2	19
代表インタビュー 4	22
「女性セブン」'97.10.16-23号 草野仁氏連載記事転載	26
横浜漢点字羽化の会規約改定	29

特別執筆

漢点字版『漢字源』の製作で大変お世話になった、横浜国立大学教育学部 村田忠禧教授より原稿を頂戴いたしました。
これは、『文芸春秋』一九九六年八月号に掲載されたもので、若干、加筆修正されました。

インターネット時代の漢字

横浜国立大学教育学部教授

村田 忠禧^{ただひ}

コンピュータで漢字を処理する際に用いられる情報交換用漢字符号系（いわゆるJIS漢字コード）が問題点を含んだものであることはかねてから指摘されてきた。それを補うものとしてJIS第一・第二水準漢字六千三百五十三字の他に、五千八百一字の補助漢字が制定されたが、実際に補助漢字を活用できるワープロやパソコンはない。漢字は日本だけでなく、中国（大陸・台湾）、韓国などでも使われている。そこで漢字文化圏共通の漢字コードを制定する動きがアメリカを中心として起こり、二万九百二個の漢字をコード化したいわゆるUNICODEが制定され、日本でも昨年JISのX0221としてこのUNICODEで定義された二万九百二字が規格化された。しかし早くもこの二万字では不十分という声が上がっており、東京大学ではTRONプロジェクトを推進する坂村健総合研究博物館教授が文学部と共同して五万字ほどの漢

字をコード化する作業が進行中である。

しかし辞書に載っている漢字をすべてカバーすることを漢字コード化の目標とするなら五万字でも不十分で、すでに中国では約五万五千字を収めた『漢語大字典』が出版されている。辞書に載っている漢字には過去に使われたが今ではまったく使われていない漢字がかなりある。そのような化石化した漢字のコード化に力を注ぐ前に解決しなければならぬ課題がある。

それは日常的な漢字情報の国際交換の実現である。JIS漢字コードを制定した当時は、対象の漢字は日本国内で使われている漢字しか念頭になかった。中国での情報交換用符号集（GBコード）も同様な認識で制定された。コンピュータで漢字を処理することが当面する課題であった当時としてはやむをえなかったのかもしれない。

しかし人の往来と同様に、漢字情報は国境を越えてゆく。日本の新聞・雑誌にJIS定義外の中国漢字が出現する。端的な例は鄧小平の「鄧」である。日本語の世界でもかなり出現頻度の高いこの漢字は日本のワープロやパソコンでは外字扱いだ。また你好（ニイハオ）の「你」も出てこない。

同様なことは中国のGBコードについても言え、畑、島、峠、辻、栃、榎など日本語では第一水準漢字であっても、日本独自の漢字（和字）であるため、GBコードにはない。このため中国語ワープロでは日本人の

姓名や地名を満足に表記できない。このように日本でも中国でも自国の漢字文化のみをコード化の対象としてきたことの欠陥が露呈している。

日本語には漢字のほかには仮名があるが、中国語は漢字だけなので、中国漢字をもカバーすることは無理、と思いがちだが、中国語でも実際に使用される漢字の種類はかなり限定される。

私は字体の違いにはこだわらず、JIS漢字でどれだけ中国語を表現できるかを調べようと『毛沢東選集』全四巻の本文(約六十七万字)を日本語ワープロに入れてみた。その漢字使用頻度の統計をとったところ、毛沢東の六十七万字の文章は二千九百九十四種の漢字で成り立っていることが判明した。漢字の使われ方を調べてみると、特によく使われるものとそうでないものとの違いが明確になった。例えば「的」という漢字はとりわけ頻繁に使われ、およそ百字に四字の割合で出現する。他にも「是」「一」「了」などの出現回数が多い。因みに日本語で使用頻度が一番高い漢字は「日」。

一般的に言って中国語の場合、出現頻度の高い漢字およそ千字で九〇%、それに千四百字を足すと九九%、さらに千四百字プラス(つまり三千八百字)で九九・九%をカバーしうる、という規則性がある。つまり

GB第一級漢字三千七百五十五字は、日常的に使われる中国語漢字をほぼカバーしうる。仮名をも使用し、しかも音と訓という複雑な使われ方をする日本語ではJIS第一水準漢字の数がその目安となるであろう。

問題はJISにしるGBにしる相互に第一水準漢字をカバーしあうコード体系になっていないことだ。

『毛沢東選集』でJIS漢字では表現できない漢字はわずか百六十九種、上位千字以内だと十一種。『現代漢語字頻統計表』(千八百八十七万字の統計結果)で九〇%をカバーするのに必要な頻度上位千五十七字のうちJIS外漢字は十六種。つまりJIS漢字にあと十六字足せば中国語情報は九〇%カバーできる。

インターネットの世界では英語だけでなく、日本語や中国語によるホームページが開設されている。『人民日報』もインターネットで読める。国境を越えて漢字情報が飛び交う時代であり、日常的に使用される漢字を相互にカバーしうる漢字コード体系を構築する必要がある。それには日本の場合ならJIS第一・第二水準漢字を総動員すれば中国語GB第一級漢字をカバーでき、中国の場合ならGB第一・第二級漢字を総動員すればJIS第一水準漢字をカバーできる、という原則で、それぞれの漢字コード体系の全面的な見直しを行うことが求められていると思う。

テーマ『心に残った本』 Part. 2』

3号に引き続き、『心に残った本』です。

今回は横浜市中央図書館サーブिस係長 永井様、墨田区立緑図書館 山内様、横浜市社会福祉協議会ボランティアセンター
滝口様にゲスト執筆をお願いいたしました。

加藤周一「羊の歌」

横浜市中央図書館サーブिस係長 永井 潤

(一)

私の心に残る一冊は、ということになると、どうしても現在の私に影響を与え続けている数人の著者の著した本のなかから選ぶということになります。

私が中学・高校生の頃から、発刊されるたびに意識的に読むように心掛け、現在に至っている数人の作家、評論家あるいは学者・研究者の人達がいいます。人文系の中では小説家の大江健三郎氏、そして日本文学研究家であり評論家でもある加藤周一氏といった人達が中

心ですが、その人たちの著作のなかから一冊ということになると、標題の加藤周一氏による「羊の歌」を選びたいと思います。(以下、この拙文では以前から親しんできたという意味と、現在でも比較的容易に入手できるという意味で、岩波新書の中から挙げることにします)

この本は岩波新書の中でも代表的なベストセラーですから、皆さんの中にお読みになった方も大勢いらっしゃると思います。この本は加藤氏自身によって一人称で語られ、その半生を綴ったものですが、その初出は朝日ジャーナルに連載され、六十六年一〇月から翌年三月まで、「続羊の歌」が六十七年七月から同年二月まで連載されました。

私が読んだのは岩波新書に収録されて発刊されてからですが、岩波新書では「羊の歌」が六十八年八月に初版が、「続羊の歌」の初版が翌月に発刊されました。私が読んだのは発行されてから大分たつてからのことですが、今年(九七年)三月に続刊の刊行が始まった平凡社刊「加藤周一著作集」の第二三巻に『「羊の歌」その後』と題する正統発刊後の思いを綴った続編が出版されました。これも私の心に残る素晴らしい作品であると思いました。

これら一連の「羊の歌」は、わが国を代表し、海外

でも高く評価されている知的巨人である氏を代表する作品であるといえるでしょう。

私がこの本から学んだことはたくさんありますが、そのなかの一つに近代合理主義的な思考方法があります。単純化して言えば、因習や權威に囚われない科学的な合理精神とでも言えるでしょうか。「現代日本人の平均に近い人間がどういう条件の下にでき上がったか、例を自分にとって語ろう」として語られる回想を中心に加藤氏の半生が記述されているこの本から、西洋の文化と日本の文化の間にあって、儒教的価値観にその多くを依拠してきた日本人が、どのようにして近代的・合理的な思考方法を受容してきたかを窺い知ることができたことは大きな収穫でした。

では加藤氏とはどのような人物なのでしょう。この著書から引用すると「中肉中背、富まず、貧ならず。言語と知識は、半ば和風に半ば洋風をつき混ぜ、宗教は神仏いずれも信ぜず、天下の政事については、みずから青雲の志をいだかず、道徳的価値については、相對主義をとる。人種的偏見はほとんどない。芸術はおおいにこれをたのしむが、みずから画筆に親しみ、奏樂に興ずるには到らない。(二二三頁)」とあります。氏の講演を一度だけ聞いたことがあります、講演の内容と氏の外観ともに、まさにこの一文のとおりでし

た。

無論加藤氏の他にも日本人の中にはすぐれた評論家あるいは思想家、哲学者と呼べる人々がかつて多数存在し、現在でも存在し続けていることは、改めて私などが述べる必要もないくらい自明のことですが、私の人間形成にあたっては、他の誰でもない加藤氏の物の見方か考え方がベースになっているように思えるのです。

(二)

加藤周一著「羊の歌」は人文系の中から「心に残った本」として選択しましたが、今回の文章の最後に社会科学系の中から二冊紹介させていただきたいと思えます。

私は大学では憲法を専攻しました。一時研究者を目指して専門の課程にも進みましたが、憲法の研究者を目標とした、いわば人生を決めかけた一冊が、高等学校一年のときに読んだ、憲法学者である小林直樹著による「憲法を読む(岩波書店)」です。この本に触発されて、東大出版会から出ていた小林教授による「憲法講義(上下)」を読み通し、進学する大学では法学部を選び、憲法のゼミナールで勉強をして、できれば憲法研究を一生の仕事にできたら、という夢を持ちま

『夜と霧―ドイツ強制収容所の体験記録』

(ヴィクトール・フランクル、霜山徳爾訳みすず書房、一九五六)

墨田区立緑図書館 山内 薫

高校の頃、筑摩書房版の『ドストエフスキー全集

第七巻 白痴』の月報に大江健三郎が、次のようなことを書いていた。「ぼくは十四歳で、はじめてドストエフスキーを読みはじめたところだった。それから二十八歳の現在まで、ぼくはほとんど毎年のように、この茫然としてドストエフスキーだけを読んでいる一時期を過ごすことになった。それは二カ月もつづくことがあるし、一週間で終わることもある。ともかく、ぼくにとつてそれは聖週間だった。」

何気なく読んだこの一節は、その後も僕の「心に残った」。自分にとつてそうした本は何か、作家は誰か？座右の書？ 何度も読み返した本？ そう思い浮かべてみても、とても読書家とはいえない僕にとつて、残念ながらそうした本や作家を挙げることは難しい。強いて言えば、芭蕉だろうか。『奥の細道』は、数年に一回は必ず読みたくなって手に取るし、七部集の評釈も同じように読みたくなる時期がある。

本や作家ではなく、テーマという設定でなら、それ

は「ナチス・ドイツにおけるユダヤ人の強制収容所」に関するものであると言える。中学に入学したばかりの頃、英語の教師は授業をそっちのけで、ヒロシマやアウシュヴィッツのことを、写真集まで持ってきて、さかんに話すのだった。その時初めてアウシュヴィッツに出会ったという訳ではない。小学校に上がってまもなく、毎日通った銭湯に貼ってあった、アラン・レネの映画『夜と霧』のポスターのこと、高学年になってから、近くの同級生の母親から関東大震災における朝鮮人の虐殺の模様を聞いたこと、その二つは鮮烈な印象として記憶の壁の中にずっと残っていた。しかし、その英語教師に少なからぬ影響を受けたことは否めない。(実は後年になって、その教師が「野呂重雄」という作家であることを知った)

いま僕の手元にある『夜と霧』は、奥付に「昭和三年八月一日 第一刷発行、昭和三年九月五日 第五刷発行」と記されているから、この本は、わずか二十日余りの内に五回も版を重ねたことになる。昭和三年、一九五六年は、先のアラン・レネの映画が封切られた年で、相乗効果から爆発的に売れたのだろうか。本の見返しには「一九六三、五、二〇 二〇〇円なり」と僕のメモがある。この本は、老夫婦がやってきた小さな文房具屋の棚に十数冊の売れ残った書籍の一冊としてあった。そこは書店ではないので、注文を受けて取り寄せたにも係わらず、注文主が取りにこなかった本が残っていたのだろう。その本は、刊行後七

年も経って少々黄ばみ、カバーも一部破れているので五〇円買って買つたものだ。早速七〇ページ近くある前半の解説を読んで圧倒された記憶はあるが、「一心理学者の強制収容所体験」という本編の方はだいぶ後になってから読んだ。

・・・収容所における個々の人間の生命の徹底的な無価値のなかで、内面的な拠り所を持たなくなった人間のみが崩壊せしめられた。未来を失うと共にその拠り所を失い、内的に崩壊し身体的にも心理的にも転落した。そして次第にこの「世界」が存在しなくなつたかのような感情をもたざるを得なくなる。「人生から何をわれわれは期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。」・・・

それ以降、筑摩のノンフィクション全集に収録されている「アウシュヴィッツの五本の煙突」、「夜と霧」の一年後に刊行されているコーエンの『強制収容所における人間行動』をはじめ、毎年あるいは数年おきに「強制収容所」に関する本を読まずにはいられない。もちろんそれは「聖週間」などではなく、自分の居場所を確認する作業のようなものかもしれない。もちろん確認できることなどないのだが・・・。

この九月のはじめに、『夜と霧』の著者フランクル

が心臓病のために九二歳で亡くなったという新聞記事に接し、彼が未だに存命であったことに、聊かびつくりした。その驚きをもたらしたのは、同じく強制収容所体験を持つ心理学者、ブルーノ・ベッテルハイムのことをすぐに思い起こしたからであった。ベッテルハイムはフロイト派の精神分析学者で一九七八年に翻訳された『昔話の魔力』（評論社）によつて知り、『自閉症——うつろな砦』（みすず書房）では、子どもへの接し方に感銘を受けた。そのベッテルハイムは一九九〇年三月一三日の未明にビニール袋に頭をつつこんで自ら命を絶つた。この三月一三日という日は一九三八年ドイツがウイーンに侵攻した記念日だったという。八七歳にして自死を選択したベッテルハイムの収容所体験の重さはいかほどのものであったか。彼は一九六〇年に『鍛えられた心——強制収容所における心理と行動』を出版した後、一九七九年に『生き残ること』、自死した年の一九九〇年に『フロイトのウイーン』と三度にわたつて、強制収容所の問題を集成している。その中でベッテルハイムは一貫して、ユダヤ人達はずげ戦わなかつたのかという、彼らのゲットー的思惟を批判している。またアンネ・フランクが世界で、あれ程までに受け入れられているということは、ガスを忘れたいという我々の願望である。「・・・何百万と

いう人々が、あの劇や映画を愛するのである。なぜならそれは、アウシュヴィッツが存在するという事実にわれわれを直面させはするが、同時にその持つ意味をすべて無視するようにわれわれを促すからである。もし万人が善良であるならば、アウシュヴィッツは本当には決して存在しなかつたのであり、それが起こる可能性は全くないからである。」さらに、アンネの極度に私的で、優しい、繊細な世界に逃げ込み、日常的な態度や活動に可能な限りしがみつこうとする能力を賛美することは、極限状態においては致命的であると述べている。

ベッテルハイムが亡くなって以来、折に触れて彼の著作を読むことが多くなった。アカデミー賞を受賞した映画『シンドラーのリスト』を彼が見たら何と云うだろうか。西井一夫は映像時評の中で、この映画について次のように述べている。(『みすず』三九七号)「『過去を振り返る』ことが『過去に涙を流す』ことと同義になってしまうような、肅然症候群への不快」「君はどうやって生き延びたか、その時何をしたのか、と戦争が終わっても『人びとは、いつまでもたがいに問いつづけるに違いない』とトレプリンカで消されたコルチャックは日記に書いた。『すなわち最もよき人々は帰ってこなかった』とアウシュヴィッツか

ら生還したフランクは書いた。生き残った人々は、この問いと死者の絶対的沈黙と共に生きていかねばならない。『生き残っても夜が、夢が残っている』、たとえ昼に生活できるようになっても、という言葉は被害者意識などとはまるきり別のものだ。そこがスピルバーグにはわかっていない。」

この映画と比較対称されるクロード・ランツマンの『シヨア』は、生き残った人、元ナチスの将校、ナチスへの協力者、あるいは傍観者達に対するインタビューで全編が構成されている。昨年そのシナリオは読んで強烈な印象を受けたが、先日衛星放送で四日間にあたって、この九時間余に及ぶ映像作品が再放送された。何人かに頼んでビデオに収録したけれども、何時になれば全編通して見る時間をとれるだろうか。

『夜と霧』から始まった、絶滅収容所の問題は、こうして毎年必ず頭をもたげてきて、一時期を占領して様々な本や映画に触れさせる。ちょうど今はその時期で、『ヴェニスへのゲットーにて―反ユダヤ主義思想史への旅』(徳永恂、みすず書房、一九九七)という本を三遊亭円朝の怪談と平行して読んでいます。

追伸、今月は連載「点字から識字までの距離」はお休みさせていただきます。

本に育てられたんだ

横浜市社会福祉協議会 ボランティアセンター

滝口 朝子

どうやって、本と出会ったんだらうか。

私は、典型的なテレビっ子世代で、大のテレビ好き。幼い頃は「カリメロ」のTシャツを着、幼稚園に行く前には「ピンポンパン」「ひらけポンキッキ」、夕方のマンガタイムには「サザエさん」に「ドラえもん」「タイムボカンシリーズ」「世界名作劇場」「特撮もの」……。ちよつと、この頃の「本」は思い出せない。鮮明な記憶は、小学校3年生頃から始まる。ある日の本屋での出来事。

母がおもむろに2冊の本を差し出す。文庫本タイプの児童書で、タイトルは「オムくんトムくん」「森からの手紙」。それまで自分の世界にはなかったものだったためか、少し考えて……。 「読んでみる」と言って読み始めたら、何か楽しいし、いろんな人・動物と知り合いになれたではないか。本と出会ったきっかけは、そんなことだった。ポプラ社・フォア文庫・岩波ジュニア：読む程に内容に引き込まれ、考えさせられ、それに量が多くなって活字も小さくなった。じつくり時

間をかけて読み、図書室にも通うようになった。： 自称「本の虫」の誕生である。自分の性格が単純なためか、「出会い」の部分はあまり、いや全然劇的な感じじゃなかった。でもきつと、「出会い」とは、こんなものなんだらうと思う。

外遊びに音楽、テレビ：いろいろな経験してきた中で、「本」もまた、タイトルに示した様に「育ての親」である。児童書の「童話」や「物語」で栄養をつけた私は、中学生になると、また違った種類の本に出会った。ちよつと、友達からマンガを借りて、親に内緒で読んでいた頃、このマンガをそのまま文章化した様な小説群に出会った。コバルト文庫という、集英社の出版によるものだ。マンガ世代の私にはびつたりの文体で、学園もの、推理サスペンス、ラブコメディーなどなど、SFを除きいろいろと読んでみたが、登場する人の年齢や性格が自分に近かったのか、氷室冴子や藤本ひとみの本を中でも好んだ。

小説家って、本当に頭がいいというか、努力家だと思ふ。ストーリーの組み立て方が上手い作家など、読んでいてすぐにその世界に引き込まれてしまう。それに、きめ細かいストーリーである程、よく調査・取材されている。登場人物の心理描写やその場の状況を表す言葉が巧みである程、「小説家ってすごいな」と尊

敬し、彼らの得意なものひとつを人間観察して、その職についたような気持ちになってみようなど思っただこともあった。

本の中では、（私にとつて重要なのが、ここである。）自分がヒーロー・ヒロイン、気に入ったキャラクターになれる。現実では言えないことも、その世界では、言える性格になっていたりする。高校を卒業する位までの間、私はずいぶん本の中でいろいろな体験をさせてもらったと思う。また本の中の現実にはいないキャラクターばかりでなく、その作家の記事を読んでは、真似できそうなことを挑戦してみたりと、作家自身の経験からも学ぶところが多かったと思っている。

本と自分との関わりについて、振り返りの作業をした中で、気がついたことは、本の世界に入っている間は、自分がいつもの地味な性格でなくいることができる存在であったこと。その世界から抜け出てからも、必ず何か「思うところ」を残していつてくれる存在であったこと。…どの本がと特定できないけれど、最近出会った本も含め、出会ったものすべてが、今の私の血や肉になってきたのは確かである。「自分は本に育てられたんだ」…そう思っ、最初に出会った「オムくんトムくん」「森からの手紙」はもちろん、私の財産は全て、今でも書棚に並べてある。その時の私の思

いと共に。

やっぱり、本は読まなくちゃ：

書いている途中で、いろいろなことを思い出して、うまくまとめられなかったため、乱文乱筆になってしまった。しかし、この様な振り返りの機会を思いがけず与えられたことに、感謝している。

いい機会をありがとう。



佐藤やじる「ふしぎな目をした男の子」

会員 小堀 美紀

今から三年ほど前のことです。初めて戸塚に引越してきた私は、何とも不思議な感情を感じていました。それは、あたりの風景を見知っているような、なじみがあるような、一口に言って「なつかしい」といった感覚でした。

初めて見るはずの街が、なぜこんなに居心地がいいのだろう。戸塚の街の、細くて曲がりくねった坂道や、丘の斜面をけずって無理矢理のせたような家や、高台にかたまって建っている新興住宅などの風景を眼にするたびに、何となく知っている気がする、来たことがあるような気がする、と不思議で仕方ありませんでした。



そんなある日、偶然その「なつかしさ」の正体がわかりました。私は子供の頃に大好きだった童話の本を、いまも持っていて時折読み返すのですが、その本の著者略歴の欄に「現在、横浜市戸塚区在住」との記述を見つけたのです。あつと思いました。一瞬で理解しました。私が懐かしいと感じた戸塚の風景は、その人が書いた童話の舞台だったのです。本当のところ、その

著者は、生まれ育った街である横須賀を舞台にする事が多く、この本が本当に戸塚を描いているのかはわかりません。しかし、戸塚にもよくある、丘や坂や緑の多い風景が、たびたび本のなかに登場します。そのことに気付いたとき、架空の物語の中の街が、現実目の前に現れた気がして、とても感動しました。私は戸塚の街に、子供の頃その人の童話の中で訪れていたことになるとは、なるのです。

幼い頃住んでいた場所を故郷というのなら、半分本の中で過ごしていたような子供時代を送った私にとつての故郷は、その童話の中の街でもあるような気がします。戸塚に来たときに感じた奇妙な感覚は「生まれて初めて故郷を訪れた」という不思議さだったのでしよう。

この本は、「だれも知らない小さな国」から始まるコロボックルシリーズの第四巻にあたります。私は今は南区に越してしまつて、大好きな作家と同じ町内に住んでいるという名誉を、残念ながら手放してしまいました。けれど、コロボックルシリーズに限らず、氏の書かれたすべての童話（というよりファンタジー小説）の本を手放すことは、決してないと思います。

となりのシロ-君 (3)

「 」 へんになる字 キになる字



この5つの字が、偏になったらどうなるか

よーく見てね

漢点字もいっしょにね



(キヘン)

木 林 村 柱

(ニンベン)

人 休 体 信

(サンズイ)

水 活 河 注

(ゴンベン)

言 話 記 計

(テヘン)

手 折 持 投

偏になると左に寄って
こうなるのよ

木イシ言キ

たて長になって
形も変わるの
が多いんだね

『人 水 手』は

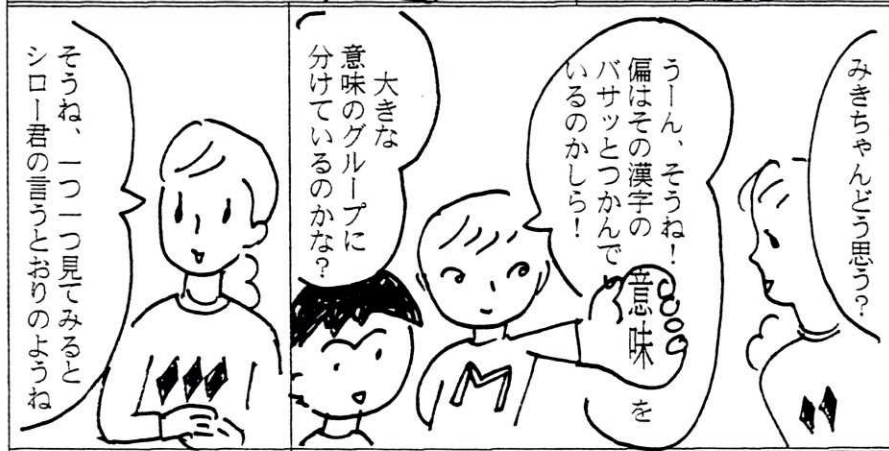
偏になると同じ字とは
思えないほど変わるのね

ニンベンはカタカナの
グイみたいだし

サンズイは
グシみたいね

そうそう

だからカタカナを
よく覚えてねって言ったの
カタカナは漢字の一部を
使って音を表しているんだから





ちよつと待って
漢点字も
おなじだあ!

ちゃんと
ヘンとツクリに
なっているんだね

そう
いいところに
気がついたわね

それは漢点字にとって
すげーく大事なことなのよ

柱 住 注
⋮⋮⋮ ⋮⋮⋮ ⋮⋮⋮



少し前にもどるわね

ここに挙げた
偏になる字のうち
『木 人 水 手 辛』は
象形文字、というの
「言」は、辛十口の会意文字です

シヨウケイ
モジ?
象形って
どういう意味?

ものの形を
線や点で
書き表すことよ

絵みたいなもの?

「言」は、辛十口の会意文字です



最初は『絵』と言っても
いいんでしょうね

木 人 水 手
木 人 水 手
木 人 水 手
木 人 水 手

絵が字になったの?

こうしてお話している言葉を
「文字」にしようとした時に
色々な『文字』が
できたんだと思うわ
漢字もその
一つなのね

絵から
字ができたの!
びっくりだなあ!

こう?
こころ?

五七五のはなし

無名子

「なに？ 五七五のはなしだと？ 俳句の話かい」
まあ慌てなさんな、俳句に縁のない話でもないが、まあお聞きなさい。

もともと五七五と言う調子というか、リズムは日本人の感性にとって心地よく響くようです。かの正岡子規のお母さんが子規になんの気なしに言った

「毎年よ 彼岸の入りに 寒いのは」
との言葉がそのまま立派に俳句として子規の句集にも載せられていることは有名な話ですね。子規はこの句の前書きに「母の詞（ことば）自ら句になりて」と断っています。

街を歩いていると交通安全の立て看板をよく見かけますね。

「キー抜いて 気を抜かないで ドアロック」
とか

「よく見たね クルマ来ないね 渡れるね」
と言った具合にね。

これらは俳句ではありませんが、五七五の調子が何と

なく親しみを感じるではありませんか。

わが国の憲法にも五七五がありますよ。

第二十三条「学問の 自由はこれを 保障する」
とね。

さて地名を調べてみましょう。

大阪府（おおさかふ） 四条畷市（しじょうなわてし） 北出町（きたでちよう）

どうですか、ちゃんと五七五になっているでしょう。

ところでこの地区の郵便番号は何だと思えますか？
なんと五七五なのですよ。

嘘だと思ったら郵便局で聞いてもらいなさい。

ではまた。

注 四条畷市北手町の郵便番号は、平成十年二月

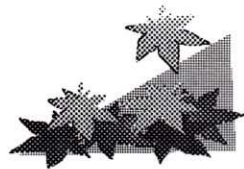
二日から五七五・〇〇四三になります。



- ⑤ 每 𠄎 𠄎 𠄎 … 海 𣶒 𣶒 𣶒
 悔 𣶒 𣶒 𣶒
 梅 𣶒 𣶒 𣶒
 晦 𣶒 𣶒 𣶒
 ⑥ 寸 𠄎 𠄎 𠄎 … 寺 𣶒 𣶒 𣶒
 守 𣶒 𣶒 𣶒
 村 𣶒 𣶒 𣶒
 討 𣶒 𣶒 𣶒
 付 𣶒 𣶒 𣶒
 ⑦ 寺 𣶒 𣶒 𣶒 … 時 𣶒 𣶒 𣶒
 詩 𣶒 𣶒 𣶒
 持 𣶒 𣶒 𣶒
 待 𣶒 𣶒 𣶒
 ⑧ 尺 𠄎 𠄎 𠄎 … 駅 𣶒 𣶒 𣶒
 沢 𣶒 𣶒 𣶒
 昼 𣶒 𣶒 𣶒
 ⑨ 東 𣶒 𣶒 𣶒 … 棟 𣶒 𣶒 𣶒
 西 𣶒 𣶒 𣶒 … 要 𣶒 𣶒 𣶒
 南 𣶒 𣶒 𣶒 … 楠 𣶒 𣶒 𣶒
 北 𣶒 𣶒 𣶒 … 背 𣶒 𣶒 𣶒
 ⑩ 良 𣶒 𣶒 𣶒 … 朗 𣶒 𣶒 𣶒
 眼 𣶒 𣶒 𣶒
 娘 𣶒 𣶒 𣶒
 浪 𣶒 𣶒 𣶒
 郎 𣶒 𣶒 𣶒
 ⑪ 里 𣶒 𣶒 𣶒 … 野 𣶒 𣶒 𣶒
 理 𣶒 𣶒 𣶒
 厘 𣶒 𣶒 𣶒
- 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (さんずい) + 𠄎 𠄎 𠄎 (毎)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (りっしんべん) + 𠄎 𠄎 𠄎 (毎)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 [きへん] + 𠄎 𠄎 𠄎 (毎)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (にちへん) + 𠄎 𠄎 𠄎 (毎)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (つち) / 𠄎 𠄎 𠄎 (寸)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (うかんむり) / 𠄎 𠄎 𠄎 (寸)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (きへん) + 𠄎 𠄎 𠄎 (寸)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (ごんべん) + 𠄎 𠄎 𠄎 (寸)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (にんべん) + 𠄎 𠄎 𠄎 (寸)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (にちへん) + 𠄎 𠄎 𠄎 (寺)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (ごんべん) + 𠄎 𠄎 𠄎 (寺)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (てへん) + 𠄎 𠄎 𠄎 (寺)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (ぎょうにんべん) + 𠄎 𠄎 𠄎 (寺)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (うまへん) + 𠄎 𠄎 𠄎 (尺)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (さんずい) + 𠄎 𠄎 𠄎 (尺)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (尺) / 𣶒 𣶒 𣶒 [旦 𣶒 𣶒 𣶒])
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (きへん) + 𣶒 𣶒 𣶒 (東)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (西) / 𣶒 𣶒 𣶒 (女)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 [きへん] + 𣶒 𣶒 𣶒 (南)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (北) / 𣶒 𣶒 𣶒 (にくづき)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (つきへん) + 𠄎 𠄎 𠄎 (良)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (めへん) + 𠄎 𠄎 𠄎 (良)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (おんなへん) + 𠄎 𠄎 𠄎 (良)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (さんずい) + 𠄎 𠄎 𠄎 (良)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (良) + 𣶒 𣶒 𣶒 (邑)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 (里) + 𣶒 𣶒 𣶒 [予 𣶒 𣶒 𣶒])
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 [おうへん 𣶒 𣶒 𣶒] + 𠄎 𠄎 𠄎 (里)
 〈𣶒 𣶒 𣶒〉 [がんだれ] / 𠄎 𠄎 𠄎 (里)

([] 内は、これまでに出ていない漢点字です。)

以上のように、幾つかの部首を点字の符号にして、漢点字を組み立てようとしても、上下左右の逆転や、部首の選択・省略が避けられませんでした。



岡田さん・テレビの主役・あれこれ

会員 西 淳策

羽化の会の皆さんならこの番組、八月六日にテレビ東京で岡田さんが出演された「追跡！テレビの主役」をご覧になった方も多いことでしょう。見落とした人にはビデオを撮ってありますのでその内容はその方に譲ります。また、たまたま会のメンバーとして、雨宮さんといっしょに収録に加わるよう声をかけられた私にとつては、そもその経緯もほとんど知りません。そこで普段あまりなじみのない「テレビの裏側」を私が見たまま、感じたままにお伝えすることにしたわけです。結局われわれ二人は最後のほうにチョコット出演？しただけでしたので、大部分の時間が待機であり、その間収録の模様とか内幕を少しばかり覗き見ることができたのです。

でもこのテレビのドラマを見て、岡田さんの生立ちや漢字に対する執念や努力が本当によくわかりま

した。お世辞ぬきに感動的でした。これだけは予め申し上げておく必要があるでしょう。

私にとつてテレビに出るのは勿論、中に入るのも、現場に立ち入るのも何しろ初めてなので、テレビ局の玄関に入ってからキョロキョロしどおしでした。第一これまでこの番組の放送を見たこともなく、どんな内容かさえも知らなかったのです。スタッフに案内されて、控え室で岡田さん雨宮さんと落ち合い、夕食弁当を頂いて時間となり、いざ、スタジオへ。大きな部屋の中には背景となるセットが用意され、照明が天井やここかしこ、ケーブルが床に這い、テレビカメラが何台も各所に配置され、大勢のスタッフが右往左往している雰囲気はいかにもの感じで、いよいよとエキストラの私でさえ緊張してしまふのです。本番収録のスタートには秒読みなんかするので尚更です。

台本はロビーで待っている間に初めて渡されたのですが、それには、骨組みのやりとりは書いてはあっても、あくまでも番組制作側のためのもののようなのです。

リハーサルがあるようになっていましたが、実際は始まる前にここが直前の出番を待つ場所、ここに座れという程度のものでした。本番で、なんの前打ち合わせなしに司会の草野仁氏から、質問が向けられたのです。しかも我ながらこんなにアガるとは思っています。

した。自分でもまともな答になつていなかったと、あとあとまで気になつてしまいました。CMを含む五分程度の番組に一時間十五分もかかっていますから、あるいはと期待していたのですが、放送では発言の一部がカットされていきましたので、半分ホットしたのも正直なところですよ。

場面は点訳図書「漢字源」の完成でした。何かご都合もあつたのでしょうか、なんとあろうことか私にお鉢が廻つて来たとは。事情の知る人にはお解りのように、これはもうミスキャストでした。第一、手配師が手配されたんではサマになりませんでした。とついグチにはなりましたが、実のところ、この機会に新しい経験やら、楽屋裏を見られたことを考えると、充分お釣りがきたと言つてよいでしょう。

さて、では本論？を。パート一は「シャルウイダンス」のおばあさん。二回の自殺までも試みた逆境の末、死にいたる病魔に冒されながら社交ダンスを習い始め、奇跡的に回復、今もダンスを続けて幸福な現在をかみしめているという感動のストーリー。

この間、我々羽化組はセットの裏側で出番を待つわけです。対談の場を直接は見れない位置ですが、近くにモニターがあつて進行状況はわかります。ただテレビと違つて音声は出ません。耳にとどくのは発言者の

肉声だけです。聞き取りにくいのです。ドラマのビデオは部屋全体にスピーカーで流れるので、これはしっかり聞こえます。こうして番組の流れを追う間に、あちこち見渡せ、いろいろと観察できたわけです。組立セットの裏側の板には「台車にのせるな」なんて書いてあつたりして、そんなことも文字どおり、舞台裏の楽しさですよ。

制作に携わるスタッフは台本には総勢五十名ほどの名前が出ています。動いている人々を見てみると、もう殆どが二十代と見られ、若者の世界の感があります。出演者たちとの年令のギャップがなんとなく、説明はしにくいのですが、しっくりしないものを感じました。これは内容とは独立したビジネスの側面が、スタジオの現場ではもろに伝わるからかも知れません。モニターにはドラマ出演の俳優さんらしい人達が、自分の演技を確かめるためでしょう、群がり立つて見えています。ビデオの中に出てくる役と素顔の本人とを見比べたりするのもなかなか楽しいものです。おやあの中年の人はお医者さんだな、あの女の人は・・・とか。また収録の対談で、ゲストが涙ぐんだりするのを彼らがニヤニヤしたりするのもです。そう、この番組はお涙頂戴が売りものとか、確かに主役の物語は泣かせるものがあります。でも造られたセットの舞台や、

決められた進行そのものは、これは虚構の世界といつてよいでしょう。出演者の側とテレビを見る側とでは、それぞれ浸る雰囲気随分と差があるものだなと肌で感じました。そんな中でゲスト方はよくあんなふうになんか涙ぐむことが出来るものだと、さすがプロと感心する一方、周囲がニヤツとするのもよくわかるのです。

シャルウイダンサーが待機の席に戻り、続いて岡田さんの出番。我々二人が出るのは最後の方だったのでこれも待ちです。その間、彼女が対談の中でもちよつと云つてたように、席に戻つてからしきりとスタツフに不満をぶつけていました。踊る自分の姿をビデオで初めて見て、どうも踊る姿勢、つまり、背が丸くなつているのが気に入らないようです。予め見せてくれれば、取り直しもできたのにと局側に文句を云いたいのでしょう。帰るまで言い続けていました。応対していた若者も無視するわけにもいかず、どうしてよいか困つている感じでした。

我々見ている方には、ずっとダンスを続けて、幸福を克ち得ているオールドレディに感嘆し、楽しくご主人と踊っている姿に微笑ましく思いこそすれ、格好などには全然気にもとめなかつたのですが。そこで思つたのは人間とは表向きだけでは判らないものだということ。あれだけ奇跡を実現し、幸せいっぱいこの今

なのに、それにくらべりやどういうでもないことに、悔やまされきれないとは、贅沢言えばきりが無いということでしょうか。お陰でテレビだけでなく人間の裏側までも見させて頂いたわけです。

しかしそんな心理は判らなくもありません。人はいつの間にか造られた自分自身のイメージとは違つた現実の自分に出会つた時、面食らいます。ですからそんな自分に会いたくないのです。だれしもそんな経験があるのではないのでしょうか。そこで登場するのが、柴又の寅さんではありませんが、「ガマの膏売り」の口上です。

四六のガマが自分の姿を鏡に写し、タラリタラリと流れ出る油汗を集めて四十九日の間、トロリトロリと煮つめて・・・だつたかな、かなりあやふやですが、まあそんなもんでしよう。私がこのテレビの自分を見たくなかつたし、発言を悔やむのもまさにそういうことなんですね。

始めにおことわりしたとはいえ、本題の岡田さん「主役」を置き去りにしてしまつたわけで、すくなくならず気がさしております。が同時に、今回思いがけなくも、面白い経験をさせて頂いたこと、岡田さんあつてこそと感じているのも事実です。

老蝦臺の汗は枯れても口だけは

えつ、季語？ いやあります。がま口は空（アキ）です。オソマツ。



テレビの主役

テレビ東京

代表インタビュー 4

この8月に、テレビ東京系の「追跡！テレビの主役」という番組に、本会の活動を取り上げていただきました。また、司会者の草野仁さまには、「女性セブン」に連載中のエッセイ、『心に残る出会いと言葉』にも取り上げていただきました。今回は、御礼を込めて、その辺りからお話ししていただきます。

編集部 この番組出演のお話の発端は、どのようでしたか？

岡田 よくは覚えておりませんが、この四月か五月だったと思います。神奈川新聞に取り上げていただいた記事（『うか』創刊号載録）をご覧になられたのが始まりとのことでした。

編 本会の活動と漢点字版の『漢字源』の製作にご関心を寄せられたのですか？

岡 「漢点字」という文字の存在を初めてお知りになって驚かれたようでした。

編 実際に番組に取り上げていただくことが決まったのはいつごろですか？

岡 六月の末だったと思います。本会のような地味な活動は、番組になりにくいのではと思っておりましたので、具体的なお話を頂戴しました時は、かなりどぎまぎしてしまいました。

編 この番組は、再現ドラマを中心に、司会者の草野さまがゲストに話を聞くという構成になっておりますが、ドラマの製作やその他で、こちらからお願ひしたことはありますか？

岡

『漢字源』の製作と、横浜市中央図書館にそれを設備していただいたということが、取り上げていただきたい主題です。従って、従来の点字には「漢字」がないということ、視覚障害者は、「漢字」を持たないまま読書をしているという現状をご理解いただきたいということを、先ずお願いしました。また、このような仕事は一人ではできません。やはりある程度、また市場経済に乗るものでもないということ、ボランティアの皆さまのお力なしには実現できないということを中心に織り込んでいただきたいということをお願いしました。私も製作スタッフの方々にお目にかかりました。皆さま大変熱心に取り組んで下さっているという印象を受けましたが、その辺りは如何ですか？

関係者の皆さまには大変失礼なことを申ししますが、予想を超えた出来映えと感じました。と申しますのは、私に対する取材も、細かいところまで疎かにせず行なって下さいましたし、視覚障害者、とりわけ私にとっての「漢点字」がどのような存在であるかということ、短い時間にもかかわらず、よくご理解いただいて作っていただいたと感じております。

具体的にはどこで感じたのですか？

はい、漢字のない読書がどんなものかということ表現するのに、ずいぶんご苦労なさっておられました。非常によいものになったのではないかと思われました。会員のボランティアの皆さまのお

岡

力が、この事業を成功させた原動力であるということ、また、「漢点字」の普及の困難さを、漢字の世界に生きている一般の晴眼者の皆さまにもご理解いただけるよう、高濃度の試行錯誤があったに違いないということです。

実際、私たち晴眼者の世界では、「漢字がない」ということはあり得ないことですから、漢字のない世界を想像するのは大変難しいことです。恐らく逆も真なりなのでしょうね。

「漢点字」の普及の最も難しいところはそこだと思えます。今回、テレビ出演に当たって、最初に具体的なお願いを一つしました。それは、視覚障害者の文字の状況を、実際に取材していただきたいということでした。

岡 番組の中でも、図書館の対応として出て参りましたが、そのことですか？

東京の図書館、点字図書館と一般の公共図書館ですが、二軒に、「視覚障害者の漢字の使用状況と漢点字に対する見解」について聞いていただきました。点字図書館からは、「書架の不足のために、漢点字の資料を置くことができない。」、公共図書館からは、「全く考えていない。」という回答を受けたということでした。

漢点字の考案者の川上泰一先生は、「読む」ということを最も大事にしておられたようですが、これまでの点字の世界ではどうなのでしょう？

先生がそのようにおっしゃらなければならなかったということでしょう。自身の経験以外の経験や

知識を、読書に求めるといことが、少ないと言
えるのでしよう。

岡 編

読書の環境を変えなければいけませんね。

少ないニーズも、ニーズとして取り上げていた
きたいですね。そして、「読書」に関する常識が
視覚障害者の間にも通用するものであつて欲しい
と思います。

岡 編

テレビのお話に戻りますが、スタジオでの収録はどんな印象
でしたか？

一言で言つて、大変面白かつたです。知らないこ
とばかりでしたから、番組の作られ方には、驚く
ことばかりでした。

岡 編

不満なところはありませんでしたか？

それはありません。ただ、残念なことが一つあり
ました。日本漢点字協会にも取材をお願いしたの
ですが、電話連絡がとれずに、叶わなかつたとい
うことです。故川上先生のお話も是非織り込んで
いただきたかつたのですが、出来ませんでした。

岡 編

関係者の皆さまに申し上げることがございますか？

深く御礼申し上げます。従来の点字には漢字がな
かつた、ということを一一般の皆さまにご存じいた
だきたかつたというのが、私の希望でした。その
意味では、最大限の力を傾注していただいたと思
つております。テレビ東京のディレクターの加藤
さま、武市プロダクションの植松さまには、大変
お世話になりました。ゲスト出演者の目黒祐樹さ
ま、小柳ルミ子さま、熊谷真実さま、大変ありが

とうございました。その他のスタッフの皆さまに
も心から御礼もうしあげます。そして、司会者の
草野仁さまには、細やかなお気遣いと深いご理解
を賜りました上、この度、エッセイにも取り上げ
ていただきました。深く御礼申し上げます。誠に
ありがとうございます。

岡 編

また、この番組の製作に当たつて、本会の木下
さまには、ロケーションとしてご自宅をご提供い
ただきましたし、西さま、雨宮さまには、スタジ
オにご一緒いただきました。他の会員の皆さまに
も、大変お世話になりました。誠にありがとうございます。

岡 編

さて、前号のインタビュで、もう少し掘り下げておきたい
ことがございます。それは、先ほども触れたことですが、視
覚障害者の皆さまにとっての「読書」とはどういうものかと
いうことです。読むことにあまり意欲的ではない、とおし
やっておられるように思つたのですが？

岡 編

潜在的にはそのようなことはないと思つたので
すが、現状ではそう見えますね。受け身の読書は
するけれども、自ら打つて出る読書は、あまりさ
れていないように見えます。

岡 編

プライベートなニーズは、どのように処理されているのでし
ようか？

岡 編

図書館等で受け入れて、多くは音声訳されています
す。音声訳に対するニーズが、圧倒的に多いよう
に思われます。漢点字訳に対するニーズは、現状
ではゼロに等しいですね。

つまり、積極的なニーズであれば、日本語の表記に欠かせない「漢字」に対するニーズにも積極的であるはずとお考えですか？

岡 そうです。そこが非常に不可思議なところなのです。視覚障害者からこのところを聞き出そうとしますと、「漢字は身に付けたいが、それを使つて読書したいとは思わない」という応えが返つて来ることが多いのです。

編 それは、どのように考えればよいのでしょうか？文字は読むためにある、という常識が崩れているようですね。

岡 優しく見れば、未経験がそのようなことを言わせているのだと言えるのですが、それを打開しようという動きはまだありません。

編 漢点字使用者の方もそのように思っておられるのですか？
岡 どうもそうらしいですね。漢点字は読まなくても役に立つ、と言っている人が多いのです、信じ難いことですが。

編 そしてもう一つ、六点漢字のお話の中で、これも読むことは全く配慮されていないようですが、それだけではなく、「声文字の原則」に則って作られていると言われているようですが、この辺りよく分かりません。

岡 これは、全く違うと思います。と申しますのは、六点漢字というのは、前号でも紹介されているように、音と訓の頭のかな点字を音符号として組み立てられているものです。「形声」というのは、漢字の部首を「意味符号」、「音符号」として使っているものを言います。部首は、その成り立ち

から、それそのものも本来音も訓もある「漢字」なのですから、ここで言う「意味符号、音符号」というのは、音や訓を言っているのではありませんが、「漢字」は、「象形」とか「指事」とか、基本的な文字が部首となつて、「会意」や「形声」という別の文字を作るのが特徴です。そうでなければ、漢字はもつと別のものになつていたに違いありません。試しに墨字のカタカナで、音や訓の頭の文字を使つて、六点漢字と同じようなものを作つてみれば明らかだと思うのです。

編 「漢点字」は、出来る限り漢字に添った構造になつていきますね。

岡 その「漢点字」の特徴なのです。触読文字としての「漢字」と言つてよいものと思つています。最近では、缶ビールの缶に「●●●●●●（ビール）」と点字で書かれていたり、シャンブーとリンズのビンの形を変えたり、これを以て「バリアフリー」と呼んでいるようですが、むしろ、自ら纏っているバリアに気付いていただきたいと思いますね。どうやら、読書に対する常識の差ばかりでなく、他にもまだ頭からなっていない差もあつてですね。

（以下に、草野仁さまのエッセイ『心に残る出会いと言葉』を「女性セブン」一九九七年一〇月一六日、二三日合併号から転載させていただきます。尚、この中で漢点字の完成者が

村田忠禮先生となっておりますが、川上泰一先生の誤りです。慎んで訂正させていただきます。）

『女性セブン』 97年10月16日、23日合併特大号
連載 心に残る出会いと言葉 素敵な生き方を、あなたに
第12回より転載

「漢字の存在を、その世界を、ひとりででも多くの目の
不自由な人に知ってもらいたいんです！」

漢字辞典の普及に『直向』に努力する岡田健嗣さん

草野仁（くさのひとし） 一九四四年、旧満州（現中
国東北部）に生まれ、その後長崎へ移る。東京大学卒。
一九六七年、NHKに入局。一九八五年、NHK退局後
は『世界・ふしぎ発見！』（TBS系）や『ザ・ワイ
ド』（日本テレビ系）等の司会で活躍中。

『直向』という漢字があります。

「何て読むんだろう？」と思ってしまうですが、答
えは『ひたむき』。

「そんなむずかしい漢字を使わないで、ひらがなで
書けばいいじゃないか」という人もいるでしょう。

でも『物事に熱中し、一途につき進む』という意味
の『ひたむき』は、ひらがなで書くより『直向』と書
いたほうが、意味深く、味わいがあります。

ひらがな、カタカナ、漢字と、3つの表記文字を持
つわれわれ日本人は、すごく恵まれています。ただ、

目の不自由な人たちにとっては、漢字は遠い存在のも
のでした。

接する文字は点字。この点字というのは、6個の点
を変化させ、言葉の音おんを表します。その音はひらがな
です。

例えば、『山』は『や』、『ま』。

点字はひらがなが精いっぱい。複雑な表記の漢字を
表すのは無理だ——長い間、そう考えられてきました。
「違う！ やればできるはずだ。われわれにだって、
漢字は必要だし、絶対に点字化できる！」

そのことを信じ、まさに『直向』にがんばり続けた
人がいます。

岡田健嗣さん、47才。

岡田さんは、横浜盲学校を21才で卒業し、マッサ
ージ師になります。そして24才のとき、明治学院大
学の入試にチャレンジし、合格します。

大学入試の動機は『点字の漢字化』でした。

目の不自由な岡田さんは、幼いころから、ひらがな
点字に接してきました。そのころの岡田さんは、漢字
の点字、『漢点字』の必要性をまったく感じていなか
ったそうです。

きっかけは、文学全集がテープ化され、それを聴く
ようになったことです。

ナレーターが語るある一節に、岡田さんは首を傾げました。

『彼にとって、それは慕情にほかならなかったのである』の一節。

「『ぼじょう』ってどういう意味だろう？」

父親に質問すると「恋い慕う心のことだよ」という答えが返ってきました。

「それなら、『ぼじょう』とかつていわず、『こいしたうこころ』っていつてくれればいいじゃない。なぜ、『ぼじょう』なの？」

「漢字で書いた『慕情』のほうが、味わいがあるからだよ」

「エッ？ 漢字？ 何、それ？」

健常者のお父さんと違い、岡田さんはまったく、漢字を知らない世界にいました。

「どうして点字には漢字がないんだろう？」

その岡田さんの疑問は、「漢点字を作ろう！」という強い思いに発展していききました。

「学ぶことが、ヒントになるかもしれない」

大学入学はそのためです。

在学中、岡田さんは教授やクラスメートに漢点字具体化の相談を持ちかけました。

みな、漢字のない世界にいることに驚きを示します

が、「でも、無理じゃないのかな。可能だったら、いままでに誰かが作ってるよ」という、異口同音の答えが返ってくるだけ。

何の結果も出ず、大学を出て、マッサージ業に戻る岡田さんですが、あきらめきれず「きつと、同じ思いの人がいるはずだ」と、情報を追い求めます。

そして、めぐりあったのが、横浜国立大学の村田忠禧先生です。村田先生は、漢和辞典を基に、漢点字を完成させていました。

従来の点字は6個の点を変化させますが、漢点字は8個の点の変化。複雑な漢字は8の倍の16個の点の変化で表します。

覚えるのは大変ですが、マスターできた人には、漢字による大きなイメージの膨らみがあります。頭の中に、新しい世界が立体化されていくわけです。

ただ、村田先生の漢点字は、完成したというだけで、問題はいかにこれを普及させるかということです。辞典として出版するには、多額の費用がかかります。

考えあぐねた末、岡田さんは、横浜市立中央図書館を訪れます。

「漢字の存在を、その世界を、ひとりでも多くの目の不自由な人に知ってもらいたいです！ 図書館で費用を負担して、辞典を作ってもらい、置いてもらえ

ないでしょうか！」

最初は、相手にしてもらえませんでした。

「図書館は、本を集めるところで、本を作るところではありませんからね」

点字は、1ページに文字が少ししかはいりません。

計算すると、普通の漢和辞典1冊が、漢点字辞典だと90冊の量になってしまいます。

これでは、出版社は出してくれません。でも、1個でいい。図書館に置いてもらえば、それを多くの人が利用できます。

岡田さんは、1か月間、毎日、図書館を訪れ、頼み続けます。梅雨どきの雨の中、岡田さんのその『直向』さが、担当者の胸を打ったのでしよう。OKが出ました。

『羽化の会』というボランティア団体もでき、今年3月、ついに日本初の漢点字辞典が完成し、納品されました。

まだ、漢点字を読める人は100人ほど。岡田さんは、これからもその普及に『直向』な努力を続けていくそうです。

岡田さんには番組を通じて会ったわけですが、岡田さんを見てぼくは『継続は力なり』という言葉を感じました。

人間、あきらめては何も結果は出ません。

例えば、飛行機。「空を飛びたい」と誰もがそう思い、「でも、無理だ」と、あきらめていました。でも、あきらめない人がいた。それが、飛行機の発明につながったわけです。

望みや夢があれば、『直向』に、それを持ち続け、努力することだと思えます。

ゼロの努力は、100日たつても『0×100』でゼロ。

1のような小さな努力でいいのです。

100日たてば『1×100』で、100という大きな形になるはずです。

ぼくが岡田さんから学んだもの、それは『直向』という言葉と漢字の大切さです。

おからだたけし 一九四九年横浜市生まれ。横浜盲学校を卒業後、マッサージ師になるが、漢点字実現の夢を持って一九七三年、明治学院大学に入学する。卒業後、再びマッサージ師をしながら、ボランティア団体『羽化の会』を結成し、漢点字辞典を作成。今年四月、横浜市立中央図書館に納入する。

去る、八月五日の例会において、規約が改定されましたので、ここに転載いたします。

横浜漢点字羽化の会規約

第1章 総 則

第1条 名称

本会は、横浜漢点字羽化の会という。

第2条 場所

本会は、以下の所に本部を置く。

〒231 横浜市中区山元町2丁目105番地

第3条 目的

本会の目的は、以下の二つである。

(1) 本会は、漢字体系の触読文字である『漢点字』で表わされた点字の資料を製作して、『漢点字』を必要とする者にそれを提供する。

(2) 本会は、任意のボランティア団体として、

(1)の活動を通して、日本語の標準的な表記法である『漢字仮名交じり文』を、視覚障害者の文字である点字に実現されるべきことを一般の認識に求め、『漢点字』の普及に努める。

第4条 活動

(1) 本会の活動は、以下の3つを柱として行なわれる。

1 漢点字の資料に関する要望を募り、それを製作する。

2 古典・辞書等、基本的に不可欠な文献資料を選択し製作する。

3 学習教材として必要なものを選択し製作する。

(2) 本会は、主に横浜社会福祉協議会ボランティアセンターを活動場所として利用する。

第2章 会 則

第5条 会員

(1) 本会は、横浜ならびにその近在に居住する者で、漢点字訳をボランティア活動として希望する者、および本会の活動を支援する者によって構成される。

本会の会員は、以下の2つからなる。

1 一般ボランティア会員

ボランティア活動として、漢点字書を製作し、必要な者に提供する。その方法は、主としてパソコンによる漢点字訳である。

2 賛助会員

本会の活動、ならびにその理念に賛同し、財政

的援助を通して本会を支援する。

1と2を兼ねることはできる。

(2) 入会および退会は、希望するものが随時入会、退会できる。

第6条 運営

会の運営は、代表ならびに若干名の幹事、会計によって行なわれる。代表ならびに幹事、会計は総会において会員の互選により選出され、任期は1年とする。ただし、再任はできる。

代表、幹事、および会計によって、幹事会を構成する。

第7条 総会

その年度の初めに、総会を行なう。

総会は、出席会員によって成立する。

総会は前年度の活動報告、決算報告と当年度の活動計画及び予算計画の審議、決定を行なう。

第8条 例会

毎月1回、原則として15日に、全体の例会を行なう。

例会は、活動等に関して話し合い、研究し、報告される場である。

第9条 会計

(1) 会計の運営は以下の3つからなる。

1 一般ボランティア会員による会費

2 賛助会員による会費

3 助成金

会計年度は、4月1日から翌年3月31日とする。

第10条 会費

(1) 会費の種類

会費は、通常会費と臨時会費に分けられる。通常会費は、以下の納入規定により定められる。

臨時会費は、幹事会の承認を経て徴収される。

(2) 会費の納入

1 一般ボランティア会員は、通常会費を月額

300円とし、毎年4月、10月に6ヵ月前

納する。

2 賛助会員は、1口1000円とし1口以上とする。

ただし、一般ボランティア会員で途中入会の場合は、当該半期の残り月数に月額を乗じたものを前納する。

(3) 既納会費は、前払いを含め返還しない。

第11条 規約の改正

規約は会員にはかり改正することができる。

附則

1996年6月15日制定

1997年8月5日改定

焚くほどは風が持て来る落ち葉かな

良寛

良寛

「マンションが欲しい。クルマが欲しい。」と血まなこの庶民。一方わが国を代表する証券会社や大銀行の相次ぐ不祥事。この世に良寛さんが生きていたら、なんと言ってあげくことだろう。南無阿弥陀仏。ちなみに「落ち葉」は冬の季語。(朔)

紅葉かつ散りて女院の庵あと

小倉朔太

小倉朔太

頃は晩秋、場所は京都寂光院、折しも朱に染まったもみじがはらはらと散りそそいで、季節外れのためか観光客も少なく、建礼門院を偲ぶのにまたとない秋の日和でした。(朔)

編集後記

去る八月六日にテレビ東京「追跡！テレビの主役」で当会のこと放映されました。また、転載致しました通り、総合司会の草野仁氏が『女性セブン』にエッセイを書いて下さいました。テーマを初め、今回はゲスト執筆も数多く頂き、本当にありがとうございました。この場を借りて、皆様に深く御礼申し上げます。

横浜市中央図書館に今年度受け入れていただける漢点字訳書籍が決定致しました。

新潮・臨時増刊『短歌・俳句・川柳 一〇一年』
芥川龍之介『侏儒の言葉』の二点です。

その他にも個人の方々からの点訳も作成中です。漢点字訳をご希望の書籍がございましたら、是非ご連絡下さいますようお願い致します。

次回の発行は十二月十五日、テーマは「一年を振り返って」です。ご意見・ご感想をお寄せ下さい。

TEL・FAX 045(261)1723

宗助悦子

前回は入力・変換に関わる一般的事項や変換後の校正について説明しました。今回は、入力・変換に関わる一般的事項の補足事項として、オプションによる条件設定とページ行の編集について、やや詳しく説明します。

1. 入力・変換に関わる一般的事項(その2)

(1)オプションによる条件設定

f.9 キーは、各種条件を設定する「オプション」になっています。すでに簡単な説明はしましたが、ここでもう少し詳しく説明をします。この「オプション」の機能は、何度か改訂の度に更新されていますので、ここで説明するのが最新版です。

最初の3行は、入出力パスを設定するようになっています。これは、ファイル読込の画面で、ファンクションキーの1～3に割り当てられるパス名です。パス名とは、ドライブ名と、サブディレクトリ名を示すもので、例えば A:¥DOC¥のように指定します。最後の¥マークは省略してもかまいません。システムで自動的につけます。プログラムが立ち上がるとき、この入出力パス1のテキストファイル名リストを自動的に読み込みますので、これが実在のパスでないとエラーになります。ただし、プログラムが止まってしまうわけではないので、その場合には f.6 でドライブを指定するか、f.9 でオプションを指定すれば、正常に動作を開始します。パス1にフロッピードライブを指定することもできますが、その場合はプログラムを立ち上げる前にフロッピーディスクを挿入しておくことを忘れないようにして下さい。

4行目はバックアップパスです。バックアップの使い方については、すでに説明しましたが、1つ便利な使い方をご紹介します。通常、いろいろの作品を入力し、それを別の人に校正してもらったりすることが多いので、直接フロッピーに入力される方が多いようです。このままで変換作業をすることはもちろん可能ですが、長い文章になると、フロッピーの方がかなり動きが遅くなります。それに、フロッピーは時々書き込みや読込のエラーを起こすこともありますので、安全のためにも変換作業はハードディスクで行いたいものです。

それにはまず最初に目的とするテキストファイルをハードディスクの適切なディレクトリにコピーしなければなりません。このディレクトリは、上記の入出力パス1にします。

ハードディスク上で変換、校正の作業をして、そのまま終わりにすると、フロッピーディスクには変換の結果が残らないので、前もってバックアップパスをフロッピードライブにしておきます。そして次の作業に移る前に、f.10 でバックアップをすると、変換の結果出来た一式のファイルがフロッピーディスクにコピーされます。

5行目はプリンタ機種です。プリンタによって、いろいろな条件が違うので、これは必ず正確な機種番号を入れる必要があります。1行文字数は、現在すべてのプリンタで32としています。しかし、1ページ行数はそれぞれ異なることがあります。これらの数字は、機種を選ぶと自動的に設定され、それが表示されます。特にページレイアウトを検討するときや、目次を作るときは重要な要素となります。

8～10行目はページ付けに関するものです。ページ付けをなし(2)にすれば、ページ番号は印刷されません。そして、本文は用紙の最上段から印刷が始まります。従ってこの場合の本文の1ページあたりの行数は7行目に現れた数字そのものになります。ページ付けをあり(1)にすると、ページ番号をどうつけるかが指定出来ます。主ページNaは本文につけるページNaで、通常表紙や目次のページにはつけません。特に目次や前書きが長くて、これらには本文と別のページNaをつけたい場合、副ページNaでこれを指定します。実際の点字印刷では、副ページNaは下がり数字で印刷されます。

例えば、表紙1ページ分、目次3ページ分で、それから本文が始まるような場合、開始主ページNaは-3、開始副ページNaは0とします。この場合、開始副ページNaを-3とすると、表紙と目次の部分にページNaがつきません。また、こうして指定されたページNaなしのページは、ページ行が空行になるだけで、本文が最上段から印刷されるということはありません。

11行目はエディタの選択です。エディタそのものの説明は、次項でしますが、ここで選択できるのは、**SEdit**と**JX**です。**SEdit**は**MS-DOS**に標準的につけられているエディタで、手軽に利用できますが、あまり大きなファイルは扱えないなど、使用上の制限があります。**JX**はフリーソフトウェアで、**EIBRK**システムの標準エディタとして添付させていただいているものです。

12 行目は点字を直接入力するための外字コードの選択です。一太郎で使用している外字コードは、入力する場合には Ver.4 も Windows 版も同じですが、内部で使用しているコードが違っています。そのため、同じテキストファイルであっても、どちらのコード体系を使っているのかを区別する必要があります。EIBRK で変換する場合は、一太郎 Ver.4 あるいは Windows の一太郎またはその他のエディタで入力されたもののいずれであっても、自動的に判断して変換するので、外字コードの選択はあまり重要でないと思えるかもしれません。しかし、変換後に校正をして、テキストセーブをすると、このオプションで選択された外字コードに従ってコード変換されるので、これが適切に選択されていないと後で一太郎の画面に点字が見えないといったトラブルが起こることがあります。

外字コードの3は、点字の直接入力に16進の点字コードを利用する場合です。せっかく16進コードで点字を入力しても、この外字コードが3になっていないと、点字コードが通常の英数字と解釈されて、全角文字になってしまいます。

次のRSポートNoとボーレートは、点字プリンタをコンピュータに接続する場合の通信条件です。点字ディスプレイの機種は、EIBRKH には関係ありませんが、EIBRKB で点字ディスプレイ(ピンディスプレイ)を使う場合の機種選択です。

最下行では、デフォルトプリンタを設定するようになっています。これは、前述のプリンタ機種の設定が、そのファイルに限られるのに対して、ここで設定したプリンタ機種は、ファイルを初めて変換するとき自動的にそのファイルのプリンタとして設定されるものです。

(2) ページ行の編集

変換・表示画面で f.6(ページ行)を押すと、ページ行の編集に入り、画面の下にその内容が表示されます。ページ行データがまだ入力されていないときは、右端に印刷されるページNoが表示されます。これは、ファイルのページNoではなくて、実際に点字印刷されるページNoですから、目次を作るときなどに便利かと思えます。このままの状態でも、f.7(次ページ)、f.8(前ページ)を押すことによって、ページ単位の移動が出来ます。ページ単位の移動には、シフト + f.5 でページ数を指定してそのページの第1行を表示することが出来ます。

ページ行にデータを入力したり、すでに入力してあるデータを修正したりするには、f.1(入力)を押します。ページ行の左端には、原文のページNoを入れるようになっていますが、最初はそのページNoを入力するようになります。ここに何も入れたくないときは、0を入力して下さい。リターンキーを押すと、直ちにその数字が点字に変換されて左端に表示されます。カーソルはページ行に表示されるべき文の入力待ちの状態になります。すでに入力されたデータがある場合は、そのテキストデータが表示されて、入力待ちとなります。最初は上書きモードになっている(カーソルが塗りつぶし型)ので、既入力データを修正するような場合は、必要に応じて INS キーを押して挿入モード(カーソルはアンダーライン型)にして下さい。

挿入モードでスペースキーを押したり、DEL キーを押したりすると、既入力文字列を左右に移動することが出来ます。こうすることによって、変換後の文字列を中心においたり、左に寄せておいたりすることが出来ます。スペースは、半角モードのままでも全角スペースが入力されますが、一般の文字入力は、CTRL+XFER で全角文字入力モードにしてからにします。入力終了後はもう一度 CTRL+XFER で全角入力から抜け出すことを忘れないように。

右端の数字は、印刷されるべきページNoですが、これは前述のオプション設定画面でのページNo設定できまるもので、ここでは変更できません。入力が終了したら、リターンキーを押します。そうすると、直ちに漢点字変換が行われて、それが表示され、確認の入力待ちになります。これでよかったら、そのままリターン、そうでなかったら←または BS キーを押します。ESC キーを押すと、原文ページの入力へ戻ります。更に ESC で中味を変更しないで表示画面に戻ることが出来ます。

表示画面では、クリップボードへの積み込みが出来ます(積み込み開始位置へカーソルを移動して f.2 を押し、終了位置でリターンキーを押す)。これは、入力の画面で f.5(ペースト)によってカーソル位置に張り付けることが出来ます。一度クリップボードに積み込んだものは、別のもを積み込まない限り、そのまま何度でも使えるので、表題をページ行に表示したいときなど、便利でしょう。

作業の終了は、f.10 でプログラム全体の終了、f.6 でもとの通常の編集画面に戻ります。

